

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年10月26日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No.161】

JR東労組石川前委員長はJR内革マル派のメンバーだ！

前号で紹介した「JR革マル派43名リスト裁判」で原告のJR総連側が2010年6月30日に提出した準備書面には、「拉致監禁されたトラジャのメンバーを解放するよう迫った(当時革マル派の弾圧事件の弁護を行っていた弁護士に間に入ってもらって、交渉の場の設定を頼んだ。なお、弁護士が交渉の場に立ち会ったことはない。)」と記載がある。JR総連は、JR内革マル派の側から、当時革マル派の弾圧事件の弁護を行っていた弁護士に交渉の場の設定を頼んだことを認めた。これに関しては、元JR東労組中央執行委員(現JR労組委員長)の本間雄治氏の週刊現代裁判での証人尋問(2009年3月3日)で、交渉の警備を担当した本間氏が以下の通り証言している(「No.46~48」参照)。

(代理人)対立が生じた後、両者、すなわちJR内の革マル派と革マル派の党中央との間で話合いが持たれたということがありましたか。(本間)ありました。(代理人)場所は、どこで行われたんでしょうか。(本間)お茶の水か神田の近くのホテルだと思います。-(中略)-(代理人)革マル派の中央は誰が出てきたんですか。どういう立場、あるいはどういう身分の人が出てきたんですか。(本間)弁護士が出てきたというふうに聞いています。(代理人)JR内革マルの方では、つまり本間さんたちの方ですけれども、どういった方たちが代表者になって出ていったんでしょうか。(代理人)小田さん(注:JR総連前委員長)や石川さん(注:JR東労組前委員長の石川尚吾氏)が入ったというふうに聞いております。

一方、本間氏がJR内革マル派の代表者であったと指摘するJR東労組前委員長の石川氏は、この交渉の存在を認め、「JR革マルとか言われるのはそれではなくて、先ほど言ったように私の大先輩、この方は亡くなりましたけど、その人が拉致監禁、パクられましたので、それを救出しようではないかという先輩の呼び掛けで、革マルですか、その人たちに返せという要求をしに行ったことがあります」と述べている(週刊現代裁判証人尋問(2009年2月17日)「No.47」参照)。

JR総連側が提出した準備書面で過去の主張の矛盾が次々と露呈！

しかし、石川氏やJR総連前会長の小田氏を含むJR総連らの原告側が提出した準備書面では、この話合いが「JR内革マル派と革マル派中央との交渉」であったこと、そして革マル派中央からの解放を迫った者は「トラジャのメンバー」、つまり「革マル派の常任活動家」と明言している。この内容については、原告の石川氏や小田氏も当然同意しているはずだ。石川氏が述べた「亡くなった大先輩」とはトラジャである上野孝氏のことだろう。

準備書面、本間証言、石川証言を比較対照すると、石川氏が、当時はJR内革マル派のメンバーであったこと、トラジャである浅野孝氏や上野孝氏の解放を迫って、JR内革マル派を代表して革マル派中央と交渉したことがわかる。JR総連側が自らそれを認めているのだ。小田氏も当時はJR内革マル派のメンバーであったことになる。

つまり石川氏は、週刊現代裁判で、とぼけた虚偽の証言を行っていたことになるのではないか。JR東労組前委員長の石川氏は、自分はJR内革マル派のメンバーであると認め、自ら提出した準備書面の内容との矛盾について明確に説明しなければならない。